



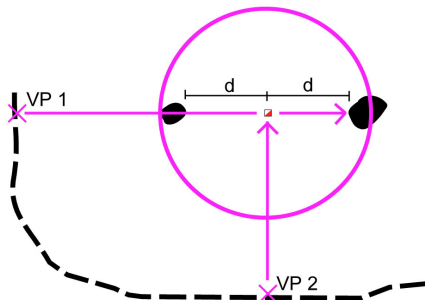
トレイル O 大会でのコントロール・セッティングにおいて、また競技において“Between ~の間”の課題はしばしば話題を引き起こしやすい。今回は IOF トレイル O 委員会での検討状況について述べる。

■ “Between ~の間” の定義

2009 年 4 月に示された「テクニカル・ガイドライン (以下 GL)」では、「~の間」は次のように定義されている。

「間」とは、2つの特徴物の、実際に相対するふち(縁)とふち(縁)とを結んだ最短距離の中間点を指す。(特徴物の中心と中心を結んだ線の中間点ではない) ”

次の事例は 2 つの非常に大きな岩 (boulder) の「間」の課題である。岩の形状は正確とする。またフラッグ位置も表示している。さて、如何に取り組むか。二つの方法がある。



1、2つの目視ラインを使用するオーソドックスな幾何学的な解法

コントロール位置は精密に設置されているので 関係する 2 つの岩と 2 つの目視ラインを利用して確認する。

はじめに VP (Viewing Point 目視点) 1 から フラッグが 2 つの特徴物を結ぶ最短ライン上にあるかを確認する。

次に VP2 からその最短ラインを正し方向に (直角方向に) 眺めて、 $d=d$ 、すなわち 1/2 の地点を確認する。

2、他の特徴物を利用する解法

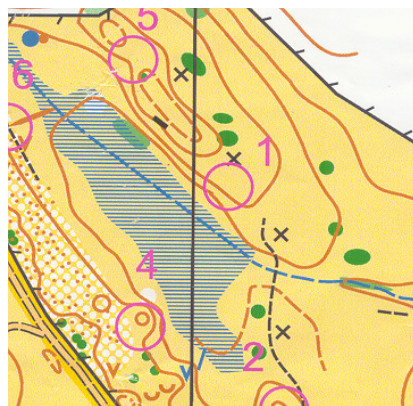
もし、上記の 2 つの目視線のうちのどちらかが使用できない場合は 1 方向からしかコントロール位置は確認できないことになり、フラッグ位置の確認は、あと 1 本のラインに替えて他の特徴物との位置関係から決めなくてはならない。これは 近くの特徴物との方角、距離による判断か、前記以外の目視線を新しく見つけ出して利用するかであるが、他にも多くの方法があるかもしれない。

しかし、もしも 上記の 2 本の目視線が利用出来ない場合は、「~の間」の使用については一考を要する。もしかしたら別の特徴物にコントロールを変更したほうが良いかもしれない。

■ 問題のあるコントロールの例

この理屈の通った明確なガイドライン、それと同様に明確な幾何学的解法にもかかわらず、「between ~の間」のコントロールのセッティングにおいてはいくつもの重要な事項がからんでくる。以下の例は、このタイプのコントロール・セッティングにおける不十分な理解がさまざまな問題を産んでいることを示している。

■ 例 1 離れすぎた特徴物



X=人工特徴物 馬のジャンプ台

1	A-D	←	X	X	≡
---	-----	---	---	---	---

この事例でまず問題となるのは、コントロール位置説明そのものが意味をなしていないことである。位置説明では「西の」(人工特徴物の) 一対だが、一見して該当するものは見当たらない。コントロール・サークルを中心とした位置関係を眺めると、この課題となる

一対の特徴物は、最も北 (磁北線の左) のもの (x) と、そして最も南の (右下の小径に沿った) 特徴物であろうことがわかる。

第二の問題点は、この 2 つの特徴物を結ぶライン上にコントロール・サークルが正確に描かれていないことである。

続く第三の問題点は、コントロール・サークルの中心が 正確な 1/2 の距離地点に合致していないことである。

四番目の問題点は、肝心の北の特徴物が丘に隠れてしまっていて見えず、位置確認が困難なことである。

このようにコントロール・サークルの中心点と位置説明が一致していないため、このコントロールは「間」のコントロールとしては適切ではない。

例2 実寸で描かれてはいない地図記号 わかりやすいように拡大しています。



8	A-D	↑	↑	≡
---	-----	---	---	---

この例の位置説明では、C 欄には表示がなく、どの目立つ樹 (以下 樹) を課題としているかが示されていない。樹がいくつもあって幾とおりの組み合わせが考えられるが、コントロール・サークルの北東および南西の外縁に接して樹木記号が三つあり、そのうちの二つが位置説明の樹であって、その中央点が課題の「~の間」となることが想像できる。

道路の分岐近くにある南西の樹木から眺めると、樹と樹の間に四つのフラッグがあることが容易に確認出来るが、そのうちのどのフラッグが中間点にあ

るものかの判断はこの地点からは難しい。そこで他の特徴物との関連をチェックする必要がある。ここでのそれは「フェンス」であろう。

ここで示したいことは、道やみぞ、あるいはフェンスのようなコントロールに近接した並行する特徴物を解答のための手がかりとして使おうとした場合、ほとんどの場合、地図記号が実物より大きく描かれているため手がかりとすることが難しいことである。

そのような不確実性があるため、このタイプのコントロールの分析は非常に難しい。作図経験のある競技者は、この記号サイズに関する作図上の問題についてよく判っているが経験のない他の競技者はその知識を持っていないという競技上のアンフェアを招くことになる。

■ 例 3 どれが課題の特徴物なのか



わかりやすいように拡大しています



x=目立つ樹

これも例1に似た意味の無い位置説明の例である。C欄で「西の」という表現を使っているが「西」にあるペアは明らかにコントロールの一部分ではない。地図をよく眺めると、コントロール・サークルからいちばん外れた「最も南西」と、「最も北東」の樹が課題を構成するペアなのだとわかる。

この課題を解くには2本の幾何学的な目視線が必要になってくる。まず2本の樹を見通せる線だが、それは無い。次に正しい方角からコントロール・サイトを眺めて特徴物間を2等分するための目視線もとれない。

そこで課題を解くためには関連性のあるほかの特徴物を使うことだが、ここでの関連特徴物はほかの樹だが、いずれもコントロール・サークルから10m以上離れているので信憑性が低くて使

えない。

■ 必要要件

これまでの三つの例に共通する問題点は、2つの特徴物の「間」に関する表現の難しさである。これは対象となる特徴物が、いずれの場合にもコントロール・サークルの外側にあることから来ている。

このことはIOFのコントロール規程(International Specification for Control Descriptions)に相反している。この規程では、位置説明のC欄には、コントロール・サークル内にある特徴物を表記することの理解である。

したがって次のことが推奨される。

- 1、“Between ~の間”を課題とするコントロールについては、コントロール・サークル内あるいは円に接している特徴物を使用する。(コントロール・サークルから外れた特徴物は使用しない。)
- 2、位置説明のC欄では、コントロール・サークル内のいくつかの特徴物のうち、どの2つの特徴物がペアとなるかが確認できる表現でなければならない。

この条件に適合する例を次に示す。



上記の地図に関して付け加えるならば、他の小さな岩石は地図上に描かれてはいない。課題の解答にあたっては、エリア内の全ての岩石について、注意深い確認が求められる。確認に際しては、まず大きな岩石から始めるとよい。

その他の留意事項としては、明確に判断できる場合を除いて「Z正解なし」コントロールのは避けるべきであろう。

以上、テクニカル・ガイドラインに関

する最近のトレイルO委員会での方向性を説明した。本件に関しては、次回発行のガイドラインの内容に反映される予定である。Long Distance (遠距離) コントロールについても、近くコメントが出される見込みである。
(こやま たろう)

■ お詫びと記事の訂正

前号(2010.02)の矢板インカレトレイルO大会レポートの記事中に誤りがありました。

最後のセクションで、「コース・セッターは中尾吉男」、また、「山口征矢が補佐し」とあるのは「コース・セッターは高田弘樹」、「運営責任者は山口拓也」のいずれも誤りです。

ここに訂正し、関係者にご迷惑をおかけしたことについてお詫びします。

執筆者:こやま たろう

★★ アジア選手権大会協賛 トレイルO大会(JOA公認)の お知らせ

2010/5/3(月・祝)

大高緑地(名古屋市緑区)

クラス:A、B

いずれも オープン・クラス & Pクラス

申込締め切り:4月19日(月)

詳しくは トレイルO協会ホームページで

<http://www.trail-o.com/>

★★ IOF ETOC 2010 ヨーロッパ トレイルO選手権大会 2010

2010/8/4-6

Bollnas, Sweden

誰でも参加できます○

問い合わせは:

こやま たろう(トレイルO委員会)まで。

taro-ktrailo@xb3.so-net.ne.jp

★★★ IOF WTOC 2010 世界トレイルO選手権大会 2010/8/8-13

Trondheim, Norway

はたして今年は 日の丸がセンター・ポールに揚がるか……?